



はれるんマガジン

～気象・地震に関わる素朴な疑問に答えます～ 発行：福岡管区气象台

今月の素朴な疑問

梅雨の時期で特に大雨が降りやすいのはどんな天気図のとき？

前線が対馬海峡にあって東シナ海から大量の水蒸気を含んだ風が吹いてくる天気図のときは、九州北部で大雨が降りやすくなります。

今年も梅雨の季節がやってきました。九州北部は6月11日頃に梅雨入りしたとみられます。ちなみに昨年の九州北部の梅雨入りは6月26日頃で、過去(記録のある1951年以降)最も遅い梅雨入りでした。前回の2020年5月号でも触れましたが、日本は春と本格的な夏の間、1か月半ほど雨がたくさん降る期間があり、この期間を「梅雨」と呼んでいます。「梅雨」は、中国南部や日本列島の東アジアだけに見られる現象で、ヒマラヤ山脈やチベット高原が偏西風に影響することが原因といわれています。九州では年間降水量の約3～4割が梅雨の時期に降ります。梅雨時期に雨が少ないと水不足になりますが、一度にたくさん降りすぎると災害をもたらします。最近では数時間に数百ミリもの雨が降るような雨の降り方が目立っており、九州北部では昨年まで3年続けて「大雨の特別警報」が発表され、大きな災害が発生したことはご存じでしょう。これから、テレビなどで気象予報士が天気図を示して今後の雨の予想が何ミリなどと解説する姿が増えてくると心配になります。そこで、過去に九州北部で災害が発生したような大雨が降るときには特徴的な天気図の形が現われますので、これを知っておくといいでしょう。



図は、平成30年7月豪雨があったときの天気図を模式的に示したのですが、注目するところは前線の位置と等圧線の形です。このように対馬海峡に前線があって、東シナ海から九州あたりで等圧線が南西(台湾のある方向)から北東(九州のある方向)に向かって斜めに引かれているような形の時、九州北部にはとても湿った空気が流れ込みます。九州から離れた場所の等圧線の形や低気圧の位置などは若干違うこともあります。過去に九州北部で

大雨になったときの天気図は、どれも同じ特徴をもっています。

大雨がもたらす災害には、がけ崩れや土石流、河川の氾濫、低地の浸水などがありますが、これらの災害は起きやすい場所とそうでない場所があります。自分が暮らしている地域やいつも通っている場所でどのような災害が起きやすいかは、市町村の「ハザードマップ」で確認することができますし、普段から周りの状況をよく見ておくことで知ることができます。雨が降るときにいつも水に浸かりやすい場所があることや、あふれそうになる水路や川があることなどを頭に入れておけば、いざというときに身の安全を守ることができます。



大雨を予想した場合には气象台は気象情報を発表しますし、テレビでは大雨に対する注意を呼びかけます。このようなとき、身近に災害が起きやすい場所があるなら、避難への備えなどを早めにしておくことが大切です。実際に大雨となって災害の危険度が高くなってきたら避難の必要性を判断することになりますが、周囲がどれくらい危険になっているかは「危険度分布」で知ることができます。自分の居る場所や避難の通り道に災害が

迫っているかどうか確認することで、より安全な行動をとることができます。この情報はインターネットやテレビのデータ放送などいろいろな場所から入手できます。

ご意見をお待ちしています

お気づきの点があればご意見をお寄せください。また、素朴な疑問や質問を募集します。電子メール、Fax、あるいは郵便（はがき、封書）で下の宛先までお送りください。お待ちしております。

問合せ先

〒810-0052 福岡市中央区大濠 1-2-36

福岡管区气象台防災調査課はれるんマガジン編集部

電話：092-725-3614

Fax：092-725-3163

e-mail：fukuoka_bousaichousa●met.kishou.go.jp

●マークは半角@に置き換えてください

次回の発行は7月の予定です。